

### 397 切迫早産の管理における胎児胎盤血流計測の意義に関する検討

長崎大

吉村秀一郎, 増崎英明, 中山大介, 牟田邦夫, 岡 智, 福田久信, 宮村庸剛, 石丸忠之

【目的】切迫早産における胎児胎盤血流をpulsed Doppler法を用いて計測し, 管理手段としての意義について検討する。

【方法】1.妊娠30-33週の切迫早産83例(Ritodrine 経口投与群28例および点滴投与群55例)および正常妊婦100例を対象とした。これらにおいて, 超音波pulsed Doppler法を用いて, 臍動脈, 胎児大動脈, 胎児中大脳動脈, 胎児腎動脈および子宮動脈のpulsatility index(PI)を測定した。2.ritodrine 点滴投与群において, 点滴前後の各PIを測定した。3.点滴投与群における早産例および正期産例の各PI値を比較した。

【成績】1.点滴投与群では臍動脈( $0.74 \pm 0.16$ )および子宮動脈PI値( $0.67 \pm 0.14$ )が対照群( $0.89 \pm 0.17$ および $0.78 \pm 0.16$ )に比べ有意( $p < 0.01$ および $p < 0.05$ )に低下していたが, 大動脈, 中大脳動脈および腎動脈PI値は3群間で差はなかった。経口投与群ではいずれも差はなかった。2.点滴前後の血流計測では, 臍動脈, 大動脈および子宮動脈の各PI値( $0.95 \pm 0.15$ ,  $1.84 \pm 0.33$ および $0.80 \pm 0.13$ )は点滴後( $0.74 \pm 0.16$ ,  $1.55 \pm 0.21$ および $0.67 \pm 0.14$ )に有意に低下していた(それぞれ $p < 0.05$ ,  $p < 0.01$ および $p < 0.05$ )。3.正期産例では点滴後臍動脈および子宮動脈の各PIは有意に低下したが, 治療に反応せず早産した例では差を認めなかった。

【結論】切迫早産治療において臍動脈および子宮動脈の血流計測は, 治療効果の判定や予後の推定に有用である。

### 398 早産の原因と児の予後からみた妊婦健康診査の時期についての検討

社会保険広島市民病院

大本裕之, 長野宏史, 小田佳恵, 太田雅博, 澤井秀秋, 野間 純, 正岡 博, 吉田信隆

【目的】厚生省局長通知による1996年11月の改定で妊婦の健診回数は妊娠24週より35週まで2週間に1回に増加させるよう指導されたが, 早産は22週からと定められており, 児の予後と早産の原因の観点から早産の予防のための適正な妊婦健診のあり方を求める事を目的とした。【方法】1990年1月より95年12月までの総分娩数5424例中早産は754例で, 管理法を異にする多胎妊娠を除いた単胎643例を対象とし, 早産の原因とその頻度および児の予後について検討した。【成績】①早産率は12.2%, その内当院管理妊婦の早産率は4.8%と母体搬送が早産率を高くしていた。②奇形児を除く生産579例の児の生存退院率は妊娠22週から26週までそれぞれ3/8例(37.5%), 9/16(56.3%), 11/15(73.3%), 15/20(75.0%), 13/15(86.7%)と増加し, 27週以降は90.0%から100%を推移した。③児の予後で重要な妊娠22週から26週の早産の原因は腔内胎胞脱出を伴う頸管無力症24/95例(25.3%), 前期破水15/95(15.8%)そして切迫早産28/95(29.5%)を合わせると実に70.5%を占めた。④頸管無力症の平均入院時週数は23.6週, 平均分娩週数は25.8週と他の早産原因に比して有意( $p < 0.001$ )に妊娠の早い時期を占めた。⑤入院開始週数は最も早い症例で頸管無力症20週, 前期破水21週, 切迫早産19週であった。【結論】我々は先年より妊娠中期の早産対策の重要性および効果, 特に頸管縫縮術の重要性について発表してきた。今回の結果, 児の予後・早産原因などの観点から, 頸管無力症・前期破水・切迫早産を妊娠19, 20週の時点で詳細な妊婦健診を施行する事で予知し, 超早産児の出生を減少させるような産科管理を行う必要性が示された。